



特集

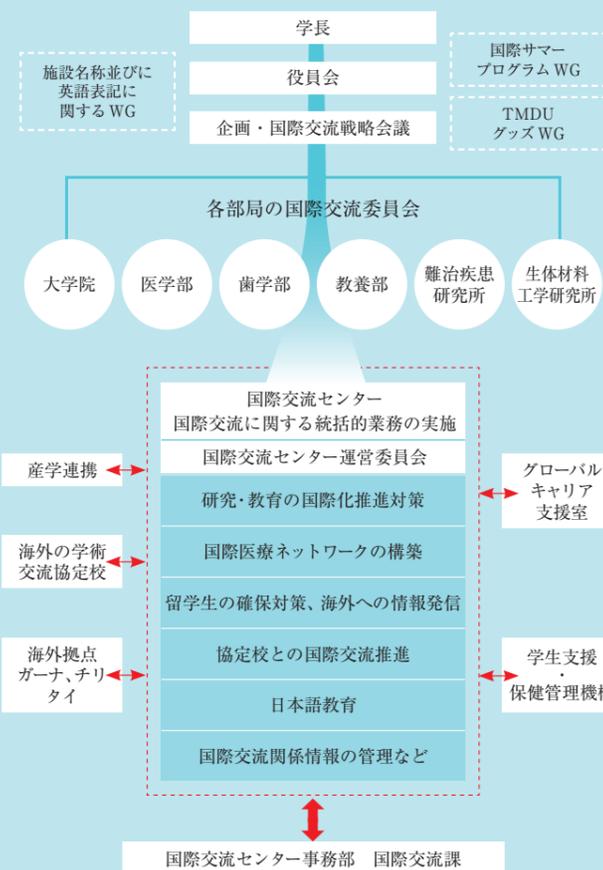
# 世界の国際交流拠点へ

留学プログラムの拡充、外国人留学生の獲得など、全国の大学が最優先の課題として取り組んでいる国際化。優秀な学生や研究者と交流を図り、世界に認知度を広げていくためにも全学を挙げた国際化の推進が重要となっている。東京医科歯科大学では、「国際化に関する中期目標・中期計画」を定め、国際交流センターを重要な組織として位置づけ、欧米、アジアとの様々な国際交流を大きく前進させた。本特集では、タイ、チリ、ガーナなどの研究に軸を置いた交流、ハーバード大学医学部、インペリアルカレッジとの教育面での交流などの近況を紹介しながら、日本の国際交流拠点としての役割を担いつつある大学の今をレポートする。

※イラスト内の国名は大学院医歯学総合研究科(医学系)・大学院保健衛生学研究科・医学部と大学院医歯学総合研究科(歯学系)・歯学部が国際交流協定/学部等協定を結んでいる大学・研究機関のある国を記載しています。



国際交流を推進する体制図(2013年)



ISP招聘参加者の内訳

Table with columns for Country, Year (2009-2012), and Total. Rows list countries like Vietnam, China, Bangladesh, etc.

(特: 特別枠)

東京医科歯科大学を広く世界にアピールし、優秀な若い人材を獲得することを目的として、2009年度から「国際サマープログラム」(International Summer Program, ISP)が開催されている。

グローバルに活躍する医療人材を育成

東京医科歯科大学から海外大学への学部学生の派遣については、海外研修奨励制度、ハーバード大学医学部への学生派遣、研究実習期間を利用した海外研修など、学生に対して様々な海外短期研修の機会が与えられている。

さらに、文部科学省「グローバル人材育成推進事業」(2012年度)に採択されたことで、日本人学生を

東京医科歯科大学は、以前から交流を深めているチュラロンコン大学(タイ)をはじめ、インドネシア大学(インドネシア)、ホーチミン医科薬科大学(ベトナム)と連携してコンソーシアムを形成。学生交流プログラム、国際セミナーやグローバルリトリートなどの学術会合の開催など、学生および若手研究者の国際交流を促進し、世界で活躍する人材育成に乗り出している。

このように、国際化に関する中期目標・中期計画の実施から3年が経ち、制度面・組織面を含めた国際交流体制は年々充実している。今後は、それぞれの取り組みの質の向上を目指す段階に入っていくと森尾教授はいう。

学生交流プログラムでは、東京医科歯科大学と3大学間で単位認定制度を協議し、学部学生と大学院生を対象とした「国際医歯学研究プログラム」「国際医療・歯科医療研修プログラム」を創設。学内での研修のほか、医療・歯科医療関連企業での見学にも参加できる。

対象としたグローバル化を強化する。全学生を対象に、異文化交流機会の創出、全科目最終試験問題の一部英語化、英語教育の強化などを行い、医療人に必要な英語能力の底上げを図るのが狙いだ。



国際交流センター長 森尾郁子 教授



国際交流センター Chapter 01

国際交流センターが核となり 全学体制での国際交流を推進

国際化に関する基本方針策定

国内の大学の喫緊の課題となっている国際化。留学プログラムの拡充、英語授業の増加、外国人留学生の獲得、セメスター制やクォーター制の導入など、全国の国公私立大学が独自の取り組みを進めている。

優秀な留学生を招聘

東京医科歯科大学では、2010年度から6年間の「国際化に関する中期目標・中期計画」を定め、国際化を推進するための学内環境の整備を行っている。研究・教育・臨床を通じて国際貢献への取り組みの推進がその基本方針である。

国際交流センターの主たる業務の一つは、現在、学内に200人以上在籍する留学生に対する日本語教育、異文化教育である。

それに先駆け、2009年には、留学生センターを発展的に改組し国際交流センターを開設。海外協定校や海外拠点を紹介した国際交流推進、優秀な留学生確保のための活動や学習支援、本学学生の英語教育・海外留学の支援など、本学の国際交流を一括して管理できる体制を整えている。

現在、ガーナ、チリ、タイの3

大使館推薦による国費研究留学生と、日本語の学習歴がない学生を対象とした「日本語研修コース」では、15週間(6カ月間)集中して日本語と日本文化について学ぶ機会を提供する。また、平日の夕方には、留学生や外国人研究者のためのレベル別の日本語コースを開設している。

2012年度からは、これまでの選抜方法に当たって「一般枠」とは別に「ISP外国人留学生特別選抜枠」を設け、東京医科歯科大学大学院博士課程の入学試験を実施できるようにした。初年度の参加は、学生24人のうち16人が特別選抜入試を受験した。特別枠を設けた背景について、国際交流センター長の森尾郁子教授は次のように語る。

国際化の拡充に向けた外部資金の獲得

東京医科歯科大学は、2012年度に文部科学省の「大学の世界展開力強化事業(ASEAN諸国等との大学間交流形成支援)」に採択された。このことでASEAN地域の大学と学生の相互交流がより活発に行えるようになった。



国際サマープログラムの交流会での集合写真(2012年8月28日)。



ガーナ・野口記念医学研究所共同研究センター Chapter 02

ガーナ拠点責任者 太田伸生 教授

### Message カカオの国からこんにちは

ガーナ・野口記念医学研究所  
共同研究センター  
拠点長  
井戸栄治 (特任教授)



普段は西アフリカに位置するガーナの首都アクラに常駐しており、時折、会議への参加や試薬などの物資補給のために日本に戻ってくるという勤務形態を取っています。センターへの派遣教員は、ウイルス学部門を担当している私と寄生虫病学を担当している鈴木高史先生の2人だけで、他に現地です務補佐をしていただいている志村まゆみさんの合計3人です。極めてこぢんまりとした家族的雰囲気の研究センターです。

ガーナといえば、日本では某お菓子メーカーの商品名により、国名は広く知られていることでしょう。実際に日本で生産されているチョコレートの原材料であるカカオ豆の大半はガーナから輸入されています。実はガーナでもチョコが製造販売されているのですが、日本のそれとは味も硬さも随分異なります。日本のチョコを向こうにお土産として持って帰ると、まずその名前でニココリ、次にそのマイルドな美味しさでニコ

リと二重に喜んでもらえます。ガーナのチョコはガチガチに硬いのです。しかし、これは製造技術が未熟だからというわけではなく、熱帯の炎天下でも溶けないようにとわざと油脂の成分を調整しているからなのです。その分、カカオ本来の味が凝縮されていますから、一度両者を比べて味わってください。

肝心の研究内容ですが、私たちはHIVとエイズ、蚊で媒介されるウイルス性出血熱やマラリア、さらにはアフリカ睡眠病の病原体トリパノソーマなど、日本にはなかなかできない種々の感染症について研究しています。詳しくは、本学の国際交流のページ(<http://www.tmd.ac.jp/international/three-bases/ghana/>)で毎月Newsletterを発行しており、研究活動の報告のほか、ガーナの生活・文化・風景などについても紹介しています。ぜひそちらの方もよろしくお願いたします。



野口記念医学研究所における医学科4年次の研修の様子。

アとは異なる病原体が存在します。世界をリードすべき日本の医療の立場から考えても、アフリカに拠点を持つことは大変重要なことです」  
**HIVの進化機構を探究**  
ガーナ拠点の主要な活動の一つである感染症研究では、HIVをターゲットに、アフリカという土地に根差した研究を進めている。欧米のHIV株がB型であるのに対して、アフリカは組み換え型(A/G)と、ウイルス株が異なる。WHO(世界保健機構)では先進国の抗レトロウイルス治療を世界的に導入しているが、ウイルス株の異なる欧米で開発された薬剤のアフリカでの治療効果は明らかになっていない。そこで本拠点では、ガーナをはじめ西アフリカ地域で流行するHIVウイルスの特徴を調べ、現在使われている薬剤の妥当性の評価や薬剤耐性ウイルスの出現状況などについても研究を進めている。また、アフリカのウイルス株が遺伝子組み換えで、学生や若手研究者に体験してもらおう環境としてもこの拠点は活用できるでしょう」(太田教授)  
日本国内でマラリア研究を行う場合、試料として使用できるマラリア原虫は1種類のみで、取り扱う範囲も試験管内だけに制限される規定がある。その点、ガーナでは日本で使うマラリア原虫より毒性の強い熱帯熱マラリアを使った研究が可能だ。2011年度からは野口研に蚊を飼育する施設ができたため、遺伝子改変によってマラリアに感染しないハマダラカを作る研究も行っている。もう一つのアフリカ睡眠病は、日本では馴染みのない疾患だが、人や家畜に甚大な被害を与える寄生虫性疾患としてアフリカでは問題視されている。拠点の研究では、トリパノソーマ原虫の弱点を探し出し、薬剤標的分子となり得るかどうかを解析。新しい治療に発展し得るシーズを探している。

型であることに着目。遺伝子組み換えによってウイルスのプロトタイプがどのように進化していったかという分子進化機構を明らかにし、エイズウイルスの起源に迫ることで未来の治療に役立てようとしている。HIVに関しては、JICA(国際協力機構)のプロジェクトとして、2010年から「ガーナ由来薬用植物による抗ウイルスおよび抗寄生虫候補物質の研究プロジェクト」も開始。野口研の生薬科学研究センターとの共同研究により、有効な代替医療と成り得る薬用植物の薬効成分の同定と作用機序の解明に取り組む。このような地域に根付いた伝統医療を発展・充実させ、国民が医療を受けやすくすることで結果的に感染抑制につながることが狙いだ。  
**その土地に根差した寄生虫研究**  
寄生虫分野では、マラリアとアフリカ睡眠病(アフリカトリパノソーマ症)という、西アフリカを代表する疾患に対して研究を行っている。若手教員や学生の相互交流も活発だ。2011年度には、プロジェクトセメスターの一環として、医学科4年次の学生が6人派遣されたほか、ウイルス学、寄生虫学の若手研究者2〜3人も数週間ほどガーナに派遣された。また、野口研からも2人の若手研究者を招聘するなど、相互に交流することで共同研究事業の強化を促している。  
「ガーナを希望する学生は、チャレンジ精神の旺盛なタイプが多いと思います。そんな学生がガーナ滞在を通じて一回りも二回りもたくましくなっていく。フランス語を公用語とする国が多い西アフリカにあって、ガーナは唯一英語を公用語とするなど、日本人も行きやすく、しかも、野口研は西アフリカの感染症と寄生虫に関するあらゆる情報と優秀な人材が集まっている場所。これまでの関係をより強固なものとして、将来の世界の医療に役立ててほしいと思います」(太田教授)  
現在は、ウイルス学、寄生虫学と領域を絞っているが、今後はガーナ大学デンタルスクールとの共同研究を行うなど、歯科も含めてさらに研究領域が広がることが期待される。

### 野口英世が 没したガーナ

ガーナ・野口記念医学研究所共同研究センターは、東京医科大学と野口記念医学研究所(野口研)の共同研究拠点として2008年に設置された。感染症研究の推進および感染症分野の研究者育成を目的として文部科学省が実施した「新興・再興感染症研究拠点形成プログラム」に採択されたことを契機に、以前から交流のあった野口研と、さらに実りのある共同研究を行うことを目指して研究体制を整備したのである。

東京医科大学からはガーナに、ウイルス学と寄生虫学の専任教員2人を派遣。現地採用の日本人スタッフ、野口研のガーナ人若手研究員4人を合わせた7人体制で、アフリカのウイルスと寄生虫による感染症の研究、人材交流などを推進している。

西アフリカのガーナ共和国は、赤道の北750kmに位置する。人口約2500万人、面積は23万8537

km(日本の約3分の2)で、高温多湿の熱帯気候に属する地域。イギリス植民地時代はゴールドコーストと呼ばれ、現在も金やダイヤモンドを産出する鉱物資源の豊かな国だ。日本は長年にわたりODA(政府開発援助)による支援を続けており、ガーナの日本に対する関心も高い。首都アクラは、黄熱病研究を行っていた野口英世博士が亡くなった場所。その土地に設立された野口研は、ガーナで初めてエイズウイルスを発見するなど、西アフリカを代表する感染症研究機関である。

拠点責任者である大学院医歯学総合研究科環境社会医歯学系専攻の太田伸生教授は、西アフリカ地域を代表する研究拠点として大きな期待を寄せていると語る。

「このプロジェクトでは一方が一方を援助するということにとどまらず、お互いに得るものがあります。例えば、我々研究者にとっては、ウイルスや感染症など解明すべき課題そのものが存在する場所で研究できる意義は大きい。アフリカには東南アジ

することは治療・予防の両面において大変重要だ。

「ガーナでは今も毎年何万人も人がマラリアで命を落とっています。アフリカには取り組むべき研究課題がまだまだたくさんあります。寄生虫研究は、その土地に入り込んで着手することで成り立つ分野ですの

### 人材の 相互交流も活発

若手教員や学生の相互交流も活発だ。2011年度には、プロジェクトセメスターの一環として、医学科4年次の学生が6人派遣されたほか、ウイルス学、寄生虫学の若手研究者2〜3人も数週間ほどガーナに派遣された。また、野口研からも2人の若手研究者を招聘するなど、相互に交流することで共同研究事業の強化を促している。

「ガーナを希望する学生は、チャレンジ精神の旺盛なタイプが多いと思います。そんな学生がガーナ滞在を通じて一回りも二回りもたくましくなっていく。フランス語を公用語とする国が多い西アフリカにあって、ガーナは唯一英語を公用語とするなど、日本人も行きやすく、しかも、野口研は西アフリカの感染症と寄生虫に関するあらゆる情報と優秀な人材が集まっている場所。これまでの関係をより強固なものとして、将来の世界の医療に役立ててほしいと思います」(太田教授)

現在は、ウイルス学、寄生虫学と領域を絞っているが、今後はガーナ大学デンタルスクールとの共同研究を行うなど、歯科も含めてさらに研究領域が広がることが期待される。

## 感染症研究で世界をリードする 西アフリカの主要拠点



チリ国における  
ラテンアメリカ  
共同研究拠点  
の形成

Chapter 03

チリ拠点責任者  
江石義信 教授

# 東京医科歯科大学の医療技術で 中南米地域の 大腸がんを克服

## 40年前から 蓄積された医学交流

南北に4000kmを超える国土を持つチリ共和国。日本からは地球のほぼ裏側に位置するほど遠く離れたこの国との間に、東京医科歯科大学は2009年、「大腸がんに関する臨床・科学・学術交流に関する協定」を締結した。チリ保健省および私立病院クリニカ・ラス・コンデス（CLC）とともに、大腸がんの早期集団検診システムを確立するプロジェクトを立ち上げるためだ。この協定の実現には、東京医科歯科大学とチリとの間の40年にも及ぶ交流があった。拠点責任者である大学院医歯学総合研究科人体病理学分野の江石義信教授は次のように語る。

「1968年に本学から第一外科学の村上忠重教授が初めてチリを訪問し、日本における胃がんの治療と診断について講演しました。この講演がきっかけでチリの医師たちが日本の医療技術に関心を持ったのです」

そして2010年、CLC内にラテンアメリカ共同研究拠点（Latin American Collaborative Research Center: LACRC）が開設された。早期大腸がん集団検診システムの確立を加速させるための実働拠点だ。拠点には、東京医科歯科大学の内視鏡医、病理医、分子生物学研究員がそれぞれ1人ずつ赴任しており、日本の最先端の内視鏡診断・治療技術の指導や現地医師たちとの共同研究などに取り組んでいる。

## 大腸がんの 死亡率低下を促進する

「チリでは近年、大腸がんによる死亡率が高まっています。チリでの大腸がん早期発見・治療の支援を行うことは、本学の医療技術を国際医療福祉に活用する有効な場でもあるのです」（江石教授）

チリでの大腸がん早期診断プロジェクトを進める背景には、東京医科歯科大学がJICAやウルグアイ保健省などの協力の下、1996年から2006年の間にウルグアイで実施した「大腸がんの早期予防・発見と治療プロジェクト」の経験が生かされる。このプロジェクトは、無症状の参加者約1万2000人を対象として免疫学的便潜血試験を用いた大腸がんの集団検診を実施した。

現在、LACRCでは、プロジェクト推進に向けて、環境整備や大腸がん診断・治療の標準化、大腸内視鏡医の育成に取り組んでいる。2011年には、サンティアゴ、パ



大腸がん早期診断プロジェクトの一環で内視鏡検査を行うLACRCスタッフの田中浩司助教。

「がんによる死亡率の低下のためには早期発見が必須。しかし、ラテンアメリカ諸国ではその重要性がまだ一般に浸透しておらず、無症状の市民のがん検診に対する関心は高くありませんでした」（江石教授）

そのような中で、このプロジェクトの結果では、50歳以上の受診者100人に1人の割合で大腸がんが発見された。「これは、日本の約7倍の数値であり、ウルグアイでの大腸がんの発生率の高さを裏付けることとなりました」（江石教授）

この結果から、無症状者を対象としたがん検診の有用性は、ラテンアメリカ医学界でも注目されることになったのである。

現在、LACRCでは、プロジェクト推進に向けて、環境整備や大腸がん診断・治療の標準化、大腸内視鏡医の育成に取り組んでいる。2011年には、サンティアゴ、パ

める国家プロジェクトを支援していきます」（江石教授）

## 次世代を担う 医療人材育成の場

サンティアゴでのPRENECの環境を充実させるため、サン・ボルハ病院の日智消化器病研究所には新内視鏡トレーニングセンターが開設された。同センターは、PRENECの拠点となるだけではなく、チリ国内の内視鏡医育成の場として稼働する。研修期間は3カ月間で、シミュレーターによるトレーニングのほか、大腸内視鏡検査を指導医の下で実施することで、チリ国内でまだ不足している内視鏡医の拡充を目指す。

これら一連のプロジェクトは、東京医科歯科大学の教育の場としても生かされている。2010年からは、プロジェクトセメスター期間の医学科4年次の学生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣することも開始され、これまでに18人の学生がチリ大学やCLCで研究体験している。

「クリニカ・ラス・コンデスとLACRCの本学スタッフとの間でも前立腺がんの研究など、共同研究が始まりつつあります」（江石教授）

LACRCを拠点として東京医科歯科大学の活動の場がさらに広がるうとしている。

## Message

### 大いなる前進の年 ～LACRC2012～



私立病院クリニカ・ラス・コンデス 医師  
フランシスコ・ロペス氏

サンティアゴ、プンタ・アレナス、バルパライソにおいて大腸がん早期診断プロジェクト(PRENEC)をスタートした2012年は、LACRCにとって極めて重要な年となりました。昨年2012年の1年間では、田中浩司医師の協力により2000人以上の検査が終了しました。2013年中には1万5000人の検査を実施する予定です。

また、チリ北部(コキンボ州ラ・セレナ)において3000人を対象にしたPRENECの実施も採択されました。11月にはTMDUの大山学長とともにパラグアイを訪問する機会がありました。現地では、フランコ大統領との面会やアルポ保健福祉省大臣とのディスカッションを行い、PRENECへの参加を呼びかけました。そのほか、LACRCにて南米の医師向けの研修プログラムを開催するため、JICAへの資金申請などを行っ

ています。学術協力の面では、国際シンポジウムENDOSUR(チリ)や胃腸腫瘍に関するシンポジウム(エクアドル)、腫瘍予防プロジェクト構築に関する討論会(パラグアイ)に参加しました。また11月より、診断・治療方針のアドバイスをを行うPRENEC症例検討会を毎月実施しています。

なお、病理分野の河内洋医師、分子生物学分野の小林真季博士が、昨年LACRCに着任され、研究活動を開始しています。現在は、PRENECに関連する3つの研究や、TMDUからの留学生を交えた共同研究(CLCやチリ大学にて受け入れ)を行っています。

これらの活動が、チリ人研究者にとって重要な情報交換や支援の場に結びついていくことをここに記載させていただきます。

ルパライソ、プンタ・アレナスの3都市でプロジェクトが実施される段階に入っている。チリ保健省と15の地方自治体、CLCをはじめとする4つの病院、チリ大学などの4大学が参加するCOLORED(大腸ネットワーク)が形成され、先述の3都市で1万6000人を対象とした大腸がん早

期診断プロジェクト(PRENEC)を実施することとなった。対象者は、50～75歳の一般市民で、大腸がんの自覚症状がない保険加入者である。調査は3都市の各病院で実施されている。プンタ・アレナスのマガジャネス病院では登録者を募るために看護師が地域の保健所でプ

ロモーション活動を実施。その活動は、現地マスメディアにも取り上げられ、600人以上がPRENECに登録した。登録者は、大腸がん検査のレクチャーを受講後、便潜血反応検査を行い、陽性者は別途、大腸内視鏡検査に移る。

内視鏡検査では、LACRCから東京医科歯科大学のスタッフとCLCの医師が現地に赴き内視鏡検査を行う。例えば、初回では229件の内視鏡検査を施行したところ、14人(6.1%)に大腸がんが見つかる結果となった。マガジャネス病院には、内視鏡医が少ないため、定期的の内視鏡検査のサポートに行く予定だ。

また、CLCではPRENECの参加を検討する地域を広げるための活動も進めており、チリ北部のラ・セレナでも近いうちにプロジェクトがスタートする予定となっている。

「現在は、チリ国内のみにとどまらず、エクアドルでも同国保健省と本学との国際協定の下、首都キトにあるパブロ・アルトゥーロ・スアレ病院において同様のプロジェクトが始まっており、既に110人の内視鏡検査で7人(6.4%)の大腸がんが発見されています。最近では、パラグアイ大統領から直々の要請があり、今年4月からチリCLCと本学が協力してパラグアイ保健省が進



チュラロンコン大学 東京医科歯科大学研究教育協力センター Chapter 04

タイ拠点運営管理者 川口陽子教授

# タイでの研究・教育を中核に 東南アジアの医療ネットワークを構築

## タイとの相互交流は 20年以上

タイ・チュラロンコン大学(CU)と東京医科歯科大学(TMDU)との交流は20年以上に及んでいる。1991年に両大学歯学部間で学術交流協定が締結され、2002年には医学部間でも協定が締結された。また、若手教員研修プログラムや各種シンポジウム・セミナー、日本・タイ拠点大学交流、東南アジア歯科公衆衛生研修プロジェクト(JICA)、若手研究者交流支援事業といった各種事業も展開されてきた。

2010年11月には、チュラロンコン大学内に「チュラロンコン大学―東京医科歯科大学研究教育協力(CU-TMDU)センター」が設置された。同センターを拠点として両大学の研究・教育の協力体制を強化するとともに、東南アジアの医学・歯学・生命科学の拠点としても進化・発展することを目標として掲げている。

この拠点が設立されたことで、歯学部、医学部だけでなく、難治疾患研究所、生体材料工学研究所なども含めた全学での学術交流事業を推進していくことになり、従来の学生・教員交流、共同研究もさらに拡充している。テレビ会議システムを導入し、タイと日本間で顔を見ながら会議や留学生選抜面接試験などを行えるようになった。

テレビ会議システムを利用して、英語で行われる本学の大学院講義をタイにいながら受講できる試みも開始された。タイ拠点の運営管理者である大学院健康推進歯学分野の川口陽子教授は次のように語る。

「東京医科歯科大学にはタイからの留学生が多く、これまで歯学部で約100人、医学部で約20人のタイ人留学生を受け入れてきました。そのほとんどは博士課程です。本学の留学を経験したタイ人学生たちは帰国した後、本国で教員となることが多く、次に彼らの教え子たちを留学生として本学に派遣してくれるのです。最近のタイ人留学生には初期

の留学生から数えて3代目に当たる学生もいます。特にチュラロンコン大学には本学で歯学博士号を取得した教員が20人以上いますので、各分野において本学とのつながりが深くなっています」

例えば、日本の大学で学んだタイ人の歯科医師団体「JDAT」は、東京医科歯科大学出身者が多くを占めていることから「タイ国民への口腔保健医療に対する影響力も大きい」と川口教授はいう。そのため東京医科歯科大学では、タイにいる卒業生に向けたフォローアッププログラムを3年前から開始。元留学生を再び日本に呼び、リカレント教育を行うとともに、共同研究などを促進するよう取り組んでいる。

## 在留邦人への健康支援も開始

CU-TMDUセンターでは、研究・教育にとどまらず、在留邦人への健康支援も重要な活動の一つとして位置づけている。2012年9月、第1回海外公開



大山学長およびTMDUのスタッフ・学生を迎えて開催されたJDAT主催の歓迎会(2012年9月8日)。

講座「歯の健康セミナー」を開催したところ、200人近くの日本人学生に通う日本人家族が参加。大山学長をはじめ歯学部教員による講演のほか、参加者の子どもたちにも歯磨き指導を実施した。また、タイ国内の歯科事情に詳しいタイ人歯科医師と東京医科歯科大学の歯科医師とがペアになって、在留邦人の個別相談に日本語で応じた。

現在、タイには約4万人の在留邦人がいるが、今後はより多くの在留邦人に参加してもらえようというターゲットを広げるとともに、医科も含めた健康支援活動を毎年行っていく予定だ。

センターの機能が充実するにつれて学生交流も活発化している。医学部では、2011年から「大腸がん早期診断治療プロジェクト」に関連して、医学科4年次の学生2人がプロジェクトセメスターを利用して5

## 大山学長に 名誉博士を授与

2011年7月には、大山学長に、タイ王国のシリントン王女よりチュラロンコン大学名誉博士の学位が授与された。この名誉ある学位授与は、本学の研究・教育面での貢献に

カ月間留学し、チュラロンコン大学で研究活動を行っている。歯学部

の学生派遣は2012年が第1回で、歯学科、口腔保健学科の4年次の学生10人が夏休みの1週間バンコクに滞在し、病院見学や学生交流を行い、また現地の日本人幼稚園で歯科健康教育や歯磨き指導を実施した。

このように、CU-TMDUセンターが、留学生ばかりでなく、広くタイ在住の日本人のよりどころになるように、努力していきたいと思

## Message 広く交流の拠点を目指して

国際交流センター タイ拠点コーディネーター 小野田勝次



チュラロンコン大学―東京医科歯科大学研究教育協力(CU-TMDU)センターは、元留学生にとって、シンボリック的存在になっています。本学は、長年にわたり、チュラロンコン大学から多くの留学生を受け入れ、帰国した元留学生は、タイの歯学分野の第一線で活躍しています。特に歯学に関しては、元日本留学生が、Japan Dental Alumni in Thailand (JDAT) という同窓会組織をつくっています。歯学部の元留学生は、本学と継続的に交流しており、自ら「TMDUファミリー」と称して、教育、研究面にとどまらず、大山学長はじめ広く本学関係者と家族付き合いをしています。私は以前、国際協力機構(JICA)のタイ所長をしていましたが、このような先生と留学生の関係を越えて、家族付き合いをしている大

## 東南アジアの中核として

さらに、東京医科歯科大学は2012年度「大学の世界展開力強化事業(ASEAN諸国等との大学間交流形成支援)」に採択されたことを受け、人的ネットワーク構築を核とする大学間交流はますます活発になった。

同事業ではタイ・チュラロンコン大学、インドネシア・インドネシア大学、ベトナム・ホーチミン医科大学と本学との交流を中心に、

対するものであるが、大山学長が個人的に行ってきたボランティア活動への評価も大きい。大山学長は、十数年前からチュラロンコン大学が行っている無菌科医村での歯科保健活動にほぼ毎年ボランティアで単身参加し、入れ歯治療などを行っている。タイ東北部の貧しい無菌科医村で、衛生状態も治療環境も整っていない中、治療を施すのは大変困難であり、高い技術を要する。タイ人歯科医師には治療が非常に困難だった入れ歯の治療を、大山学長がその場で成功させたというエピソードもあるという。

川口教授は「今回のタイ拠点開設も、大山学長の貢献があったからこそ実現したといえます」と話す。

「医療・歯科医療を通じて国際貢献をする際に重要なのが、元留学生たちの存在です。彼らが自分たちの国で、日本で学んだ材料や治療機器を応用して質の高い医療を提供できるよう、我々としても元留学生に対するリカレント教育をはじめ、様々な形で支援をしつつ、医療ネットワークを構築していきます」(川口教授)



医学部医学科  
教育委員長  
医歯学融合教育支援  
センター長

田中雄二郎教授



All Over The World



All Over The World



医学部長

湯浅保仁教授

ハーバード  
大学との  
医学教育提携

Chapter 05

# アジア、ひいては世界をリードするため 医学教育改革にとどまらず研究力も強化

## 医学教育の改革が学内外 からの評価につながる

東京医科歯科大学は、2002年から、ハーバード大学との医学教育提携に基づく様々な取り組みを進めている。この医学教育提携は、①ハーバード大学医学部での研修を目的とした教員派遣、②ハーバード大学医学部からの教員招聘、③ハーバード大学医学部での臨床実習を目的とした学生派遣が大きな柱となっている。

すべて英語で行う。この学生派遣は「ハーバード大学の学生と共に学ぶ臨床実習」として正規の選択カリキュラムにも設定されている。湯浅保仁教授は、2012年9月の教員派遣に参加した。ハーバード大学との医学教育提携が本学にもたらしたものは、教育カリキュラムの改革にとどまらないと語る。

ローバル人材育成推進事業」に採択され、世界に伍す医師・医学研究者育成に向けた取り組みが拡充された。教育だけにとどまらず研究力の強化も目指す

これまで派遣された教員数は、延べ130人。教員たちはハーバード大学医学部での研修で得た内容を持ち帰り、東京医科歯科大学に独自の教育をつくり上げてきた。その成果として、ブロックシステム、クリニカル・クラークシップ、医歯学融合教育などの医学教育改革が実現した。

「日本国内はもとより、アジアをはじめとした諸外国でも本学の医学教育が評価されているのはこの提携が大きく貢献しているでしょう。また、近年では本学に入学を希望する理由の一つにハーバード大学医学部への学生派遣に参加することを挙げた受験生もいるほどです」

「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」では、東京医科歯科大学医学部の腎臓病学、消化器病学、分子細胞生物学、循環器病学、精神医学の各分野から、若手研究者をハーバード大学医学部の研究施設に派遣し、国際共同研究を推進する。現在までに9人の若手研究者が派遣されており、将来は分野を超えた共同研究や他の領域に対象を広げることも視野に入れている。

2004年からは、医学部6年次を対象とした学生派遣が始まり、これまで計64人の学生が参加した。3カ月間の学生派遣では、実際の患者を受け持ち、症例プレゼンテーションから治療方針の決定まで、学生が

2005年度には、ハーバード大学との取り組みが評価され、特別教育研究経費「国際性豊かな医療人・世界的競争に打ち勝つことのできる研究者の養成」に採択された。2011年度には、日本学術振興会（JSPS）による「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」に、さらに2012年度には「グ

「医学教育の改革に続き、研究力の質も上げる必要があります。『頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム』では、ハーバード大学の研究設備を共同で使用できるので、人的交流の活性化や研究成果にも期待できます」

# 海外で基礎的な研究力を身に付ける 単位互換の相互交流プログラム

## カリキュラムの一環で 単位互換も認定

ロンドンにあるインペリアルカレッジ。イギリスでの大学ランキングで、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学に次いで3位、世界ランキングでも常に10位以内に入る名門校だ。2004年度から東京医科歯科大学は、インペリアルカレッジと交換留学協定を締結し、交換留学プログラムをスタートしている。このプログラムで留学した学生は留学期間研究課題に取り組み、留学期間の単位互換が認められる。また、留

たった田中雄二郎教授は語る。「インペリアルカレッジとの交換留学は医学科にとって初めての交換留学プログラムです。また、世界中に提携校を持つインペリアルカレッジが交換留学を結んだのも本学が初めて。これは、本学の研究レベルの高さが認められている証しでもあります。世界で見た本学の論文引用動向などの実績も評価されています」

「この交換留学プログラムが始まって9年が経ちました。今後はより一層交流が深まることを期待しています。例えば、卒業生同士、留学経験者同士で相互交流を継続して行う学生主体の同窓会組織などができるといいですね。留学経験者が交流を保つことは、将来の東京医科歯科大学のより良い国際交流にも貢献するでしょう」

学中の授業料は免除され、宿泊施設も提供される。協定締結の交渉にあ

現地で留学中の本学学生のサポート

「本学の学生には、留学期間中に研究の醍醐味を知り、視野を広げてほしいと考えています。この経験によって将来、本格的に留学する意欲が高まることを期待しています。本プログラム1期生の中には、現在、

## 入学生数と派遣学生数

年	インペリアルカレッジからの入学生数	東京医科歯科大学からの派遣学生数
2005	3	—
2006	3	3
2007	3	4
2008	4	4
2009	5	4
2010	4	4
2011	4	5
2012	5	4
2013	5	4
合計	36	32

## 東京医科歯科大学から インペリアルカレッジへの留学

医学科4年次のプロジェクトセメスター期間(10月～2月末)に毎年4人程度が留学。インペリアルカレッジから用意された12～24程度の研究課題から興味のある課題を選択する。

## インペリアルカレッジから 東京医科歯科大学への留学

インペリアルカレッジの教育カリキュラムの一環で3カ月間の研究期間が設けられている。その中の研究プロジェクトの一つに交換留学プログラムが位置づけられている。



アメリカの大学で研究職に就き、基礎研究を手掛けている卒業生もいます」

一方、インペリアルカレッジの学生は、カリキュラムの一環として、東京医科歯科大学への留学を選択する。留学期間は2月中旬からの3カ月間で、毎年4人程度、延べ36人を受け入れている。

東京医科歯科大学側も、インペリアルカレッジの学生に対していくつかのテーマに分けて研究課題を用意している。神経、内分泌、消化器、免疫などの分野が人気だという。